

建築と社会

Architecture and Society

2023 12

vol.104 No.1221

日本建築協会

特集 プロフェッショナル達の共創

生み出される「あたらしいもの」

紡ぎ出されるアップサイクル

地域、社会とともにつくるもの





2023年度 年間特集テーマ「共創」

特集 プロフェッショナル達の共創 — 9

【PROFESSIONAL FILE】

- 01 テキスタイルのアートとしての可能性
●フジエテキスタイル (西陣織アート) ————— 10
- 02 職人のイメージネーションで世界に貢献する
●モメンタムファクトリー・Orii (金属着色) ————— 14
- 03 廃棄されてしまう布をアップサイクルした新素材
●セイショク (サステナブル布積層新素材) ————— 18
- 04 工場探訪：かくも美しき化粧合板の世界
●安多化粧合板 (オリジナル化粧合板) ————— 22
- 05 月ヶ瀬探訪：第二の自治を生み出す場所
●Next Commons Lab (ワーケーションルーム) ————— 24
- 06 人とロボットの共創による「いま・ここ」の建築
●大林組 (3dpod) ————— 26
- 07 木造建築の現在地と未来 ●シェルター×大林組 (木造ビル) ————— 28
- 08 再生建築により生まれる建築の新しい価値
●再生建築研究所 (建築リノベーション) ————— 30
- 09 生き続ける建築●VOID (バイオマス素材+3Dプリンター) ————— 32
- 10 装飾ガラスの新しい可能性を研究する
●中日ステンドアート (磨ガラステラゾー) ————— 34
- 11 ゴミから感動をつくる
— 廃棄食材に新たな可能性を見いだす
●fabula (アップサイクル素材) ————— 36
- 12 デニム端材をアップサイクルした内装左官材「NURUDENIM」
●日本エムテクス (デニム素材左官材料) ————— 38
- 13 長野産りんごがレザーに！未来につながる優しい素材
●SORENA (りんご由来合成皮革) ————— 40
- 14 「コーヒーレザー®」で拓く新たな未来
●ステータシー (コーヒー豆由来人工皮革) ————— 42



建築と社会

Architecture and Society
Journal of the Architectural Association of Japan

日本建築協会

2023 12

Vol.104 No.1221

■特集予告

- 1月号/2025年大阪・関西万博に向けて(仮)
- 2月号/第30回 会員作品“私の空間作法”

ひと・まち・建築 gallery

8

637

法令 コーナー

44

462

設備 の頁

46



47



52

会告	2024年在阪建築関係15団体合同新年交礼会、日本建築協会東海支部主催建築工事実務講習会 2023年度建築工事実務講習会	1
作品作風	IIS/IIK堺新事務所 光亜興産本社	4 6
gallery	建築と陶芸の融合 ●奈良祐希	8
法令コーナー	改正建築物省エネ法・建築基準法(2年内施行)の概要について ●窪田悦郎 ～～2023年の振り返りと今後の展望～～ ●奥山陽二	44 45
設備の頁	ロボット活用による「自動化」「省力化」技術の展開～ 自走ロボットによる照度測定及び自動帳票作成システム 「T-iDigital Checker」の開発～ ●大川 洋	46
再読 関西の建築	滋賀県立近代美術館 ●玉田浩之	47
Member's Forum	イケフェス大阪2023 スペシャルツアー日本建築協会Presents! 「三休橋筋を歩く」レポート	52
information	倉俣史朗のデザイン — 記憶のなかの小宇宙 The Work of Shiro KURAMATA: A Microcosmos of Memory / 特別展 レトロ・モダン・おしゃれ 杉浦非水の世界 / 企画展 「二人の天才—葛飾北斎・月岡芳年—」 / 四谷シモンと金子國義 — あどけない誘惑	54
月間の動き	2023年10月	56
表紙写真	月ヶ瀬ワーケーションルームONOONO (撮影: 黒柳 亮)	



←ご意見ご要望はこちらから

特集 プロフェッショナル達の共創

生み出される「あたらしいもの」

紡ぎ出されるアップサイクル

地域、社会とともにつくるもの

プロフェッショナルな人々や会社を特集して3年目になる。いろいろな人の話を聞き、実際に足を運んでみると、建築も社会も、特筆するまでもなく、共創によって創り上げられていることに気づく。今回取り上げさせていただいた方々も皆、社会やプロジェクトの課題と向き合い、人と向き合い、素材と向き合いながら、ある人はコラボレーションにより共創し、ある人は素材の持つ自然の摂理と共創し、又ある人は地域と共創しながら、新しいものを生み出している。そこにはそれぞれの「想い」が込められていて、アウトプットされたものには何かしらの「エネルギーの片鱗」のようなものが感じられる。きっとそこには生み出す側が積み重ねてきた「創造のものがたり」が溢れているので、そう感じさせるのであろうと思う。そこには出会いがあり、技術があり、アイデアがあり、なにより心がある。だから私たちは感動する。片鱗から全貌が見えてくる感動を共有したいと思い、プロフェッショナル達の言葉を集めた特集を企画した。是非ご一読いただきたいと思う。

そして、今回取り上げた幾人かのプロフェッショナル達は、地球の未来と向き合いアップサイクルな素材やものを生み出している。読者は、全く別の場所で、全く別の素材で、全く別の仕組みでそれぞれが生み出したものが、実は同じ未来を目指しているということに気付くだろう。これからもっともっと彼らのようなアイデアが溢れてくることで、より進んだ、本当に豊かな循環型社会を共に創りだせるということを感じていただきたいと思う。

合わせて、今回は青年技術者の方数名と一緒に、実際に安多化粧合板にお話を聞きに行ったり、月ヶ瀬ワーケーションルームへ取材に行ったりと、実際に体験してそのものや空間に触れてみる機会を得た。やはりリアルな体験は感動を更に増幅させる。これはコロナによって逆に皆が再認識した、リアルな体験の本質だと考える。今回のプロフェッショナルの方々に興味を持った方は、是非彼らのところに足を運んでみてほしい。更に面白い話が聞けることは間違いないだろう。

12月号編集委員幹事 竹中工務店設計部 黒柳 亮

FILE 01	株式会社フジエテキスタイル	テキスタイルのアートとしての可能性	P10
FILE 02	有限会社モメンタムファクトリー・Orii	職人のイマジネーションで世界に貢献する	P14
FILE 03	セイショク株式会社	廃棄されてしまう布をアップサイクルした新素材	P18
FILE 04	安多化粧合板株式会社	工場探訪：かくも美しき化粧合板の世界	P22
FILE 05	一般社団法人Next Commons Lab	月ヶ瀬探訪：第二の自治を生み出す場所	P24
FILE 06	株式会社大林組	人とロボットの共創による「いま・ここ」の建築	P26
FILE 07	株式会社シェルター×株式会社大林組	木造建築の現在地と未来	P28
FILE 08	株式会社 再生建築研究所	再生建築により生まれる建築の新しい価値	P30
FILE 09	VOID株式会社	生き続ける建築	P32
FILE 10	株式会社中日ステンドアート	装飾ガラスの新しい可能性を研究する	P34
FILE 11	fabula株式会社	ゴミから感動をつくる一廃棄食材に新たな可能性を見出す	P36
FILE 12	日本エムテクス株式会社	デニム端材をアップサイクルした内装左官材「NURUDENIM」	P38
FILE 13	株式会社SORENA	長野産りんごがレザーに！未来につながる優しい素材	P40
FILE 14	ステータシー株式会社	「コーヒーレザー®」で拓く新たな未来	P42

テキスタイル 株式会社フジエテキスタイル

fujie textile



光る山 左より「霞の山」「涼の山」「紅の山」 製作:西陣岡本 デザイン:炭酸デザイン室

テキスタイルのアートとしての可能性

フジエテキスタイル 取締役 クリエイティブディレクター 室脇崇宏

私達、フジエテキスタイルは自社工場を持たずにインテリアテキスタイルを世界の様々な産地で作る。それぞれの産地は気候や風土、歴史や伝統を背景に技術を磨いてきた。機屋(工場)の技術もそこで働く職人達の個性も様々だが、その特徴をリサーチしながら少しずつ理解を深めていき、新しいテキスタイルの提案をするため企画アイデアを作っていく。テキスタイルの柄は、社内でデザインをすることもあれば、外部からデザイナーに加わってもらい一緒に作っていく場合もある。我々はテキスタイルのプランニング、ディレクションに力をいれる。企画により我々の関わり方は様々だが、間違い無く言えることは、誰か一者では無く、機屋(工場)+デザイナー+我々テキスタイルディレクターこの三者の共創により新しいテキスタイルは生み出される。最近力を入れている取り組み、テキスタイルのアートピースとしての可能性をご紹介します。

伝統工芸「西陣織」

様々な伝統が色濃く残る土地、古都京都。日本の布の歴史においても重要な織物の1つがここにある。1200年の歴史を持ち、美しく染められた色糸で紋様を織り上げていく伝統工芸「西陣織」である。高度な技法を凝らし、多品種少量生産される高級絹織物として知られる。西陣織の源流は、養蚕と絹織物技術が伝わった5-6世紀の古墳時代、平安時代に朝廷では工人たちを織部司(おりべのつかさ)という役所のもとに組織し、高級織物を生産させた。国営の織物業が営まれていたのである。その後、律令制の弱まりと共にその技術は民間の手に移り当時あらゆるものの最先端であった中国の織物に追いつき追い越すようにと技術を磨いていった。漢に学び、漢を離れやがてその独自性を築いていく。そして数々の戦乱を乗り越えながら、やがて11年にも及ぶ、応仁の乱(1467年)で山名宗全率いる西軍の陣地があった京都西北部で織物作りを再開したことからそれは「西陣織」と呼ばれるようになった。このように変わらず受け継がれるものと変わり続けるものが新しい魅力を作ってきた。



西陣織の織機

テキスタイルアート [光る山]

数々の困難と時代の流れの中で技術を磨き織られてきた西陣織の中に金糸、箔糸を使用する「西陣織金襴」がある。風合いが一段と豪華で浄土信仰の隆盛により、西陣織金襴は「極楽」を表現する絢爛な荘厳具として神社仏閣の堂内を美しく彩ってきた。現在、京都西陣にその技術を受け継ぎながら西陣織金襴を織る機屋、「西陣岡本」がある。「西陣岡本」は、金襴の技術を今につなぐ専門職人集団。4世代100年以上にわたり、神社仏閣で宝物として扱われる金襴を京都西陣で織り続け、日本各地の大本山へ納めてきた。柄を生地巾いっばいに織り上げることが多く、小紋柄とは異なるダイナミックな織物を得意とする。今回制作されたテキスタイルアート [光る山] は、機屋「西陣岡本」とデザイナー「炭酸デザイン室」のコラボレーション作品。「西陣織金襴の良さを守りながら、新しいテキスタイルを世界に広げたい」という思いの中で西陣織金襴の技術を受け継ぐ職人のクリエイティビティ、デザイナーが元々持つ日本らしい自然との向き合い方、精神性が生み出したテキスタイルだ。テーマとなるモチーフのデザインを手がけた「炭酸デザイン室」は、水野智章さん、水野若菜さんによるデザインユニット。[光る山] に描かれた風景は、水野若菜さんの実家である「立木観音 立木山安養寺」（滋賀県大津市）と参道、それを取り巻く立木山の自然がモチーフになっている。春・夏・秋の三部作からなる [光る山] は、緑・紫・赤で季節ごとの立木山を描いている。生家が弘法大師ゆかりの寺院で、1200年の歴史を同じく持つ西陣織とは浅からぬ縁を感じた水野若菜さん。実家の本堂には当たり前のように西陣織の織物があり、それが西陣織だと認識する前から身近な存在だった。そんな事を思う中で、自分のルーツである立木観音、立木山の景色がモチーフとして自然に脳裏に浮かんだ。[光る山] では、立木観音の云われである“光る霊木”を西陣織金襴の特徴である金糸で表現している。金糸は、金属箔を薄い紙に貼り付け、細かくスリットして糸状にすることで作られる。金属箔が貼られた平たい糸は、織ったときによじれが生じやすいため、糸の巻き方も細心の注意を払わなければならない。ねじれを防ぐために手作業を加えながら丁寧に糸を巻いていく。美しい仕上がりを追求するための大事な作業だ。長い年月、光る糸を扱い受け継がれてきた職人の緻密で丁寧な仕事が、光を纏う立木山を表現していく。そして、それぞれの鮮やかな季節を表現する色系は全て絹を丁寧に染めて使う。しっとりとした美しい光沢感に深く染まる鮮やかな色は絹糸が持つ特徴の一つだ。染め方も独特な方法で染める。その方法は「勘染め」と呼ばれ、染料を文字通り「勘」で少しずつ加えながら調整していき、料理で繊細な味を調えるように注文を受けたイメージ色に近づけていく。移りゆく季節、心に残る立木山の色鮮やかな自然の色彩、光の陰影を職人の技術が素材に込める。西陣織は、その独自の分業制や技術継承の中で、生地を織り上げるまでのそれぞれの工程で独自の発展を遂げてきた。テーマとして描かれたモチーフの立木山、[光る山] のイメージを表現する上で最も大事な工程で織物としての奥行きと深みを印象付けるのが、その織柄を表現する織組織（織模様）である。色系と糸が幾重にも重なり、極小の糸の組み合わせでどのようにモチーフを表現していくか、経糸と緯糸で細かく抑える“針とじ”や“からみとじ”など西陣独自に呼ばれる技法を織り交ぜながら職人の感性で設計していく。[光る山] にも様々な織り方が使われるが、表現したいデザインや柄は、職人がその柄をどう解釈してどのような織り方に落とし込むかにかかっており、受け継がれてきた技法と共に職人の感性によって美しい織物が作られていく。炭酸デザイン室の日本の精神性を大事にした現代的な図案と西陣織の確かな伝統技法が結びつくことによって新たな世界が生まれた。共創による新たな創造は、伝統的な紋意匠を織ることとは勝手も異なる試みであり金襴の伝統技術を駆使した新たなチャレンジだった。エキゾチックな煌めきを放つ独創的なテキスタイル、[光る山] が完成した。



「勘染め」で絹糸を染める



「光る山」の緻密な紋意匠（織模様）



フランス、パリのMusée des Arts Décoratifs (装飾美術館)「ジャポニズムの150年」展

パリ装飾美術館へ

色鮮やかな森や山々が西陣織金襴で表現された3反の反物は、21_21DESIGN SIGHT アソシエイトディレクターの川上典季子氏の目に止まり2018年開催のパリ装飾美術館の企画展「ジャポニズムの150年」に推薦されることになる。選考時、それが何であるか説明する前にパリ装飾美術館館長で総合監修のオリヴィエ・ガベ氏は「ミラクル！なぜこんなものが生み出せるのか？」と様々な質問を川上氏に投げかけた。そして西陣織の歴史的背景やデザイナーである水野若菜さんの出自、日本の精神性、様々なものが織り込まれた「光る山」の成り立ちを聞き「ジャポニズムの150年」展が、「発見者」「自然」「時間」「動き」「革新」の5つのテーマで構成される中、「自然」と「革新」をま

たぐ場所での展示が決まった。約3カ月半の開催期間中、約10万人近い人々が現代の日本のものづくりや自然に対する真摯な姿勢が表れた作品「光る山」に出会った。観覧者は作品の前でウィーン工房の話をしたり自分の生活にこの作品をどのように取り入れるかを議論したりと様々な会話を生んだようである。現在、「光る山」はフジエテキスタイルから空間を新たに彩るテキスタイルアートコレクションとして販売され、新しいテキスタイルの可能性を提案している。

共創が新たな情緒を生み出す

私達は、テキスタイルの新しい可能性を提案している。日本は繊維産業の盛んな国の一つだ。西陣織も含め、現在登録されている伝統工芸品240品目における56品目が織物や染色品などの繊維に関連するものだ。伝統工芸に限らず、様々な土地の直向きなものづくりの技術は共創により新たなアイデア、可能性を見せてくれる。テキスタイルによる表現の魅力は緻密に積み上げられた豊かな質感と柔らかさが生み出す情緒だと考えている。もちろんテキスタイルを使うことによってプライバシーが保たれたり、光を遮断したり、物音を和らげ、椅子は座りやすく身体的に快適さを与えてくれる。だがそれだけではなくテキスタイルによって生まれる有機的なリズムや、光の陰影、生き生きとした表面感や感触が情緒を生み出し、それぞれ個々が自分の感覚としての美を認識する。まだ出会った事のない様々な人々や技術の共創を通して新たな情緒を作り出していきたい。



京友禅「墨流し染め」で染め上げたテキスタイル「瞬刻」



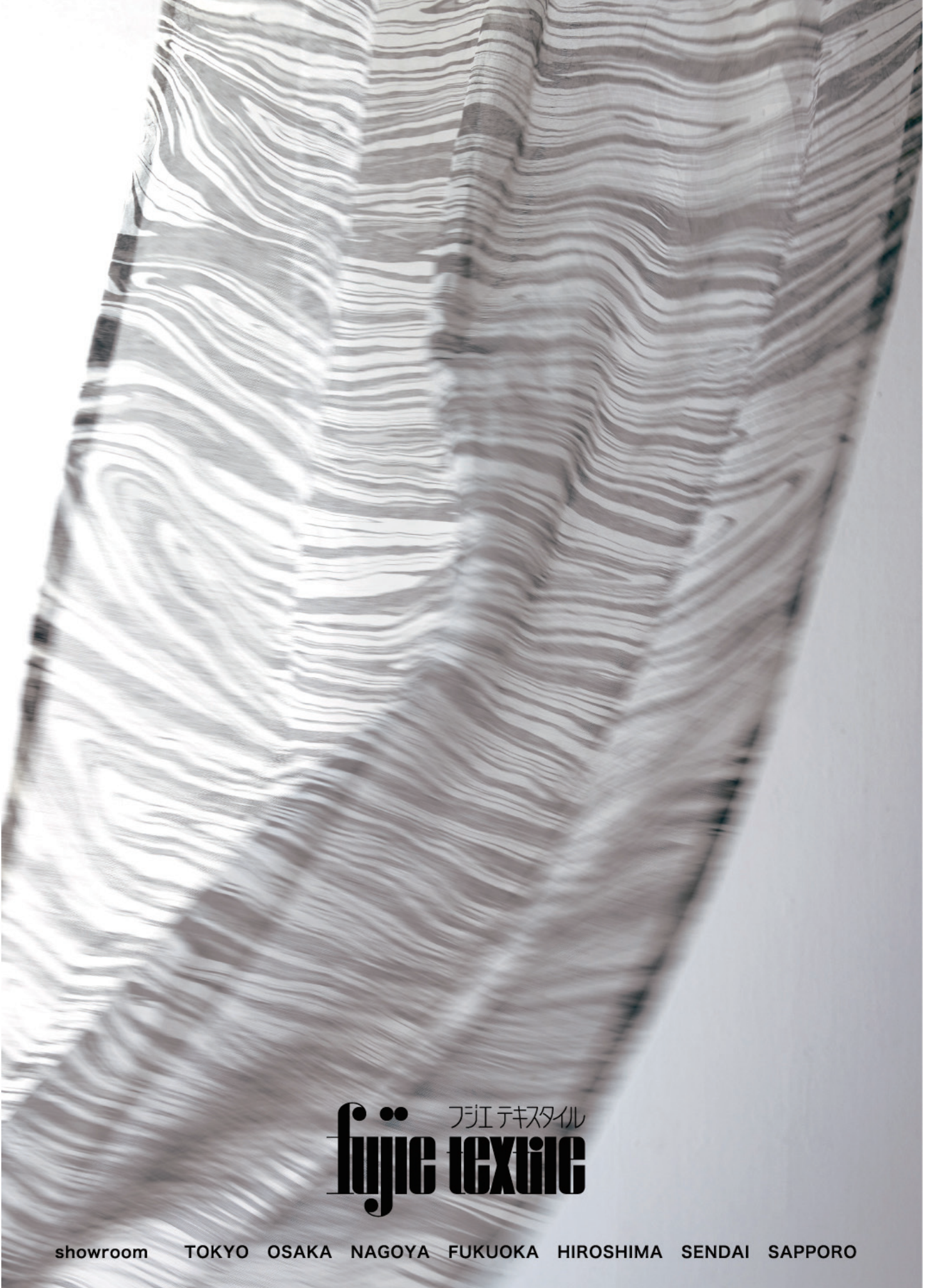
室脇崇宏

株式会社フジエテキスタイル 取締役

クリエイティブディレクター／テキスタイルデザイナー

04年 東京造形大学 環境デザイン学科テキスタイルデザイン専攻 同研究室卒業

04年 株式会社フジエテキスタイル入社 粟辻博デザイン担当



フジテキストル
fujie textile

showroom TOKYO OSAKA NAGOYA FUKUOKA HIROSHIMA SENDAI SAPPORO